



| | |
|--------------|--|
| Title | 虚血肝における細胞質局在酵素の漏出機構 : blebの形成・崩壊に関連して |
| Author(s) | 小関, 萬里 |
| Citation | 大阪大学, 1988, 博士論文 |
| Version Type | |
| URL | https://hdl.handle.net/11094/36718 |
| rights | |
| Note | 著者からインターネット公開の許諾が得られていないため、論文の要旨のみを公開しています。全文のご利用をご希望の場合は、 https://www.library.osaka-u.ac.jp/thesis/#closed 大阪大学の博士論文について |

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

| | |
|---------|--|
| 氏名・(本籍) | 小 関 萬 里 |
| 学位の種類 | 医 学 博 士 |
| 学位記番号 | 第 8371 号 |
| 学位授与の日付 | 昭和63年11月9日 |
| 学位授与の要件 | 学位規則第5条第2項該当 |
| 学位論文題目 | 虚血肝における細胞質局在酵素の漏出機構—blebの形成・崩壊に 関連して— |
| 論文審査委員 | (主査) 教授 川島 康生 (副査) 教授 鎌田 武信 教授 田川 邦夫 |

論文内容の要旨

〔目的〕

肝臓をはじめ重要臓器の虚血による細胞障害の指標として、細胞内酵素の血中漏出量が利用されている。我々は既に虚血肝において、細胞質局在酵素は虚血早期に漏出するのに対し、ミトコンドリア局在酵素は細胞が壊死した後にはじめて漏出し、その漏出量は細胞の壊死量を反映することを報告した。しかし虚血操作に伴う肝臓障害や移植肝のviabilityの判定をより早期に知るために重要と思われる細胞質局在酵素の漏出機構は未だ明らかでない。

本研究は、ラット灌流肝モデルを用いて、肝虚血早期に肝細胞膜に形成されたblebの遊離・崩壊が細胞質局在酵素の漏出と密接に関連していることを明らかにしようとするものである。

〔方法〕

実験は200g前後の雄性SD系ラットを用いた。虚血肝モデルは肝左外側葉を一定時間血流遮断することにより作成した。肝灌流はN₂ : CO₂ (95 : 5) ガスで平衡化したKrebs-Henseleit液で無酸素灌流した。灌流液の粘度は低分子デキストランの添加により調整し、灌流速度は任意に変化させた。AST (aspartate aminotransferase, GOT), LDH, G6Pase, DNA, RNA, 蛋白量は既存の方法に従い、cAST (細胞質局在AST) と mAST (ミトコンドリア局在AST) は抗体法により分別した。磷脂質はロダン鉄錯体による比色法で、プリン代謝物は高速液体クロマトグラフィーを用いて測定した。また肝の形態を光顕像および電顕像にて観察した。

〔成績および考察〕

(1) 肝虚血によるbleb形成

肝を虚血にすると、10分以内に類洞に多数の球状体が認められた。これらは肝細胞から内皮細胞を越えて類洞内に突出した bleb であることがわかった。電顕像によると bleb 中には比較的小さなオルガネラであるリボソームやERは存在していたが、ミトコンドリアや核などの大きなオルガネラは認められなかった。

(2) 無酸素灌流下の細胞内成分の漏出様式

肝を無酸素下で灌流して細胞内成分の漏出を調べると、細胞質局在酵素である cAST は灌流後 1 時間より漏出し始め、3 時間で細胞内含量の約 70% が漏出した。LDH や細胞内可溶性蛋白の漏出も同様に認められたが、ER やリボソームの構成成分である G6Pase・RNA・磷脂質の漏出は細胞質成分に比して少量であった。一方 DNA やミトコンドリア局在酵素である mAST は灌流後 4 時間でも殆ど漏出しなかった。このように漏出する細胞成分が bleb に含まれる成分と一致していたことは、少なくとも灌流開始 3 時間までの細胞質局在酵素の漏出が bleb の遊離・崩壊によることを強く示唆している。

(3) 細胞質酵素の漏出は灌流液の流速及び粘度に依存する。

通常の緩衝液による灌流では、酸素供給のため門脈血流の約 5 倍程度の流速が用いられる。無酸素灌流で流速を血流程度にまで下げるとき、全く cAST が漏出しないことが見い出された。流速を上げると漏出が始まり、しかもその漏出量が流速に比例することが明らかになった。一方 in vivo では灌流に比較して低流速であるにも拘らず、虚血解除後 cAST は急速且つ大量に漏出する。灌流液と血液では粘度が大きく異なる点に注目して、灌流液にデキストランを加えて、その粘度を血液粘度の半分程度にまで高めると、灌流肝からの漏出パターンは in vivo に近づいた。流体の流速と粘度は外壁に与える応力を比例的に増すので、類洞内に突出した bleb が血流の機械的な力により崩壊することが結論された。

[総括]

1. ラット虚血肝で生じる bleb にはリボソームやERなどの小器官を含む細胞質成分はみられるが、ミトコンドリア、核はみられなかった。
2. 3 時間までの無酸素下灌流では細胞質に局在する cAST、LDH は灌流液中に漏出したが、DNA やミトコンドリアに局在する mAST は漏出しなかった。
3. 細胞質局在酵素の漏出率は灌流速度や灌流液の粘度に依存していた。
4. 以上より細胞質局在酵素の血中漏出機構は虚血早期に肝細胞表面に生じた bleb が血流の流体力学的な力により、機械的に遊離・崩壊するためであると結論される。

論文の審査結果の要旨

本研究は虚血肝細胞からの細胞質局在酵素漏出のメカニズムを、細胞生化学および、形態学の立場から明かにしたものである。

虚血下の臓器からは細胞内酵素が血中へ漏出するため、その漏出量は虚血障害の指標として利用されている。しかしながら、その障害過程において、細胞質局在酵素のような巨大分子が細胞外へ放出される機序は不明であった。

本研究では、虚血下で漏出した細胞質局在酵素が肝細胞表面に形成された bleb に含まれていること。および、その bleb が血流という機械的な力によって遊離・崩壊させられるために、細胞質局在酵素の漏出がおこることを生化学的測定と形態的所見から明かにした。

以上の結果は、細胞障害の指標としての漏出酵素量の測定に理論的根拠を与えるとともに、虚血細胞障害の生化学的過程の研究に大きな知見をもたらした。